

# もう一つのザアカイ物語

脚本:岡崎道成

演出:小川政弘

★

この物語は、新約聖書の中のザアカイの話(ルカの福音書19章1～10節)を、作者の創作を加えて脚色したものです。実際の聖書箇所もぜひお読み下さい。

★登場人物

ザアカイ

ルデヤ

イエス

マルタ

シメオン

医者

行商人

女1、2、3、4

男1、2

<前編>

ザアカイ ……53、54、55と。今日も結構集ったな。うん、日もだいぶ傾いてきたし、もう1、2件回って帰るとするか。

N そう言って広場から歩き出したこの人は、ユダヤ人のザアカイ。ユダヤ地方でもひときにぎわうこのエリコの町で、取税人、つまり人々から税を取り立てる仕事をしています。ユダヤ地方がローマ帝国に支配されていた時代、ユダヤはその重い税に苦しんでいました。ローマは、人々から税を取り立てる仕事を自分たちではせず、このザアカイのような、ユダヤ人の取税人に請け負わせていました。しかし、ローマから仕事をもらい、同胞のユダヤ人たちから税を取り立てる取税人は、人々から嫌われていました。ザアカイも例外ではありません。

—戸を叩く音—

マルタ はい、どな…ザアカイ!

ザアカイ おっと、そんなに怖い顔をするなよ、マルタ。税を集めに来ただけなんだ。な。

マルタ 何が税だい。この間来たばかりじゃないか。

ザアカイ おやおや、じゃあ何かい、あの時もう少し待ってくれって言ったのは聞き違いかい。おれだってわざわざ二度も足を運びたかないが、お前さんが「今はどうしてもこれしかない、勘弁してくれ」って言うから、今まで待ってやったんじゃないか。今日こそはきちんと払ってもらわねえと、おれがローマにお縄になっちゃう。な、マルタ。

マルタ もう十分払ってるじゃないか、これ以上どこから出せって言うんだい。

ザアカイ なあマルタ、よく考えてみろ。おれの前の取税人なんざ、金がなけりゃ子供だって連れていったって言うじゃねえか。おれはそんな残酷なことは言わねえよ。ほら、その小麦の袋、それでいい。出しな。

マルタ これは… これはダメだよ。あたしらが食べる分だ。

ザアカイ このやろう、下手にでりゃあつけ上がりやがって。出せって言うてるんだ、どけ！

マルタ(突き飛ばされる) あっ

ザアカイ よいしょと、これでしばらくはおれの顔を見なくても済むじゃねえか。安いもんよ、なあ

N 取税人たちは、ローマが見て見ぬ振りをしているのを幸いに、決められた額以上のものを人々から取り立てていました。これも、彼らが嫌われる理由だったのです。そしてザアカイにはもうひとつ、人にさげすまれてる理由がありました。

子供1 あっザアカイだ。おーい、ザアカイだぞ。

子供2 やーい、ザアカイだ。チビのザアカイ、欲張りザアカイ！

ザアカイ うるさい！このガキどもが、とっととうせろ！

子供1 わー、怒った怒った、チビのザアカイが怒った、やーい！

ザアカイ お前ら！

子供たち きゃー…(逃げる)

ザアカイ くそ、どこのガキどもだ、今度見つけたらただじゃおかねえぞ。

N そうです。子供のころから、背が低いのをからかわれてきたザアカイ。その彼の心もまた小さく、きゅうくつなままでした。

ードア開ける音ー

シメオン ザアカイ！また来たのか。

ザアカイ ごあいさつだな、シメオン。どうだい、元気でやってるかい。

シメオン お前なんか心配される筋合はない！

ザアカイ へっへっへ、ずいぶん威勢がいいじゃねえか。それはそうと、お前さんとこの税の負担分、用意してあるんだろうな。

シメオン ザアカイ、いい加減に税を水増しして集めるのはやめろ。みんなどれほど迷惑してるか分からないのか。

ザアカイ 水増し？ 冗談じゃない。何十軒もの家を回って税を集めるんだ。時には重い穀物の袋を運んだりな。その手間賃を税に含めるのは、ユダヤ総督もちゃんと認めていることだ。人間きの悪いことわれちゃ、こっちこそいい迷惑だよ。

シメオン そんな理屈が通るものか。お前が不当に高い税を取り立ててわたし腹を肥やしているのなんか、だれだって知っているんだ！

ザアカイ おい、こっちはローマ帝国から任されて税を集めてるんだ。それを払わないのはローマへの反逆と同じだって事、わかってるんだらうな。

シメオン ローマローマって、お前だってユダヤ人じゃないか。あいつらの手先になって同じユダヤ人の仲間を苦しめるのが、そんなに楽しいのか！

ザアカイ 仲間？ ふん、笑わせるんじゃないよ。おれはお前さんたちに仲間扱いされた覚えは一度だってないね。人間、金が絡むと口がうまくなるもんだ、あーやだねえ。

シメオン 貴様…

ザアカイ つべこべ言っていないで早く出きな、ローマへの税を！ カイザル万歳！

N 夕暮れが迫っていました。帰り道を急ぐザアカイに、一人の女性が呼び止めました。こんなザアカイにも、彼の事を親身になって心配してくれる人が一人だけいたのです。幼なじみのルデヤでした。

ルデヤ ザアカイ！

ザアカイ うん？ 何だ、ルデヤか。あっちへ行け。女の相手してるほど暇じゃないんだ。

ルデヤ …また税を集めてきたの、ザアカイ？ もうみんなを困らせるのはやめて。みんながあなたのこと何て言ってるか知ってるの？

ザアカイ …どうせ悪党とか何とか言ってるんだらうよ。別に構いやしないさ。

ルデヤ うそよ。あなたが本当は気が小さくて寂しがりやだってこと、あたし知ってるもの。それに、いつもあたしの家からは、無理に税を取っていったりしないじゃない。

ザアカイ ……

ルデヤ ね、お願い。もうみんなをいじめないで。そしたらみんな親切にしてくれるわよ。また子供のころみたいにみんなで…

ザアカイ やめろ！ 何が「子供のころ」だ、何が「親切」だ！ 子供のころからチビチビってバカにされてるんだ、今だって変わりやしないさ。年だけは大人なのに、見ろ、まるで子供だ。ふん、こっけいだ。子供のころよりずっとこっけいだよ。

ルデヤ ザアカイ、どうしてそんなに卑屈になるの？

ザアカイ 卑屈？

ルデヤ そうよ。言いたい人には言わせておけばいいじゃない。背が低いのが何なのよ。

悪いことしてるわけじゃないのよ。それより同胞のユダヤ人を苦しめるほうがずっと…

ザアカイ うるさい！ お前になんか分かるか。取税人になって初めて税を集めに行った時の、あの人を軽べつし切った目つき！ 犬でも見るように人を見やがって…。どうせおれは嫌われているんだ。そういう生まれなんだ。それなら存分に好きなようにやってやる。取税人なんだ、金持ちになってやるよ。そうでなくちゃ不公平だろうが！

N 長い間人々からさげすまれてきたザアカイは、幼なじみのルデヤの言うことも、素直に聞くことができなくなっていました。ルデヤは、家へ向かうザアカイを寂しく見送ることしかできませんでした。

N そんなある日のこと。町の真ん中にある市場では、いつものように行商人たちが、所狭しと品物を並べ、道ゆく人に声をかけていました。

行商人 さあさあ、見てらっしゃい。珍しい織物がたくさんあるよ。エジプトやギリシャから特別に仕入れてきたものばかり！ ちょっとそこのだんな、どうですこれなんか。

ザアカイ うん？ どれどれ、ふん、この程度なら何枚も持つてる。もっとましなのははないのか。おい、その奥にあるのを見せてくれ。…違う、そう、それだ。

行商人 だんな、あれに目を付けるとは相当ですな。しかし残念だ、もう先約がありましてな。

ザアカイ それを売ってくれ。金は出す。その人の2倍でどうだ

行商人 えっ、し、しかし… さっき手付けを払って、残りの金を取りに帰ったんだ。もう戻ってきなさるだろうし…

ザアカイ じゃあ3倍でどうだ。

行商人 これは… 参りましたなあ。へっへっへ。そこまで言われちゃ…

シメオン おい、それをどうする気だ！

行商人 あっ、だ、だんな！ いや、その、こっちのだんなが3倍の値段で買いたって言うもんで、へっへっ、こっちも商売ですからな。

シメオン 何だと。あっ、ザアカイじゃないか。

ザアカイ あっ、シメオン！

シメオン またお前か。これはわたしが先に買ったんだ。手付け金も払ってある。あんまり大人げないことをするな、ザアカイ！

ザアカイ お前さんがこれを？ おやおや、税が高いと文句を言う割には、ずいぶん結構な買物じゃないか。せっかくだが、これはおれが買わせてもらおうよ。お前さんがこんなもの持っても仕方ない。

シメオン ザアカイ、嫌がらせもいい加減にしろよ。だいたいお前の金なんか、どっから手に入れた金だ？

—ルデヤが通りかかりにザアカイを見かける—

ルデヤ ザアカイ、ザアカイじゃない。どうしたの!?

ザアカイ ルデヤ… 何でこんなところへ？

ルデヤ(シメオンに)すみません、この人が何か…。

ザアカイ お前は関係ない、あっちへ行け。シメオン、どうしてもこれが欲しけりゃ、おれより多く金を出すんだな。それならおれもあきらめるさ。ま、その日暮らしのお前には無理だろうがな。

シメオン こ… この野郎！！

ルデヤ ザアカイ！

ザアカイ うおっ！（殴られ、倒れかかる）

ルデヤ きゃっ、あっ！

N 一瞬の出来事でした。ルデヤが、殴られるザアカイをかばおうとして一緒に倒れました。鈍い音がして、彼女はそのまま動かなくなりました。頭から、一筋の赤い血が流れています。

ザアカイ ルデヤ、おいルデヤ、ルデヤ！

—人々ざわざわと寄ってくる—

シメオン …わ、わたしじゃない、この女が、い、いや、この男と一緒に倒れたんだ。

ザアカイ ルデヤ、しっかりしろ、ルデヤ！！

N ぴくりとも動かないルデヤを呼ぶザアカイの声が、市場の賑わいにかき消されていきました。

<後編>—————

シメオン …わ、わたしじゃない、この女が、い、いや、この男と一緒に倒れたんだ。

ザアカイ ルデヤ、しっかりしろ、ルデヤ!!… あっ、まだ息がある！

N ザアカイは彼女を背負って家へ運びました。もう夕暮れでしたが、彼女をベッドに横たえると、ザアカイはその足で医者を呼びに行きました。

—ドア激しく叩く—

ザアカイ おい、開けてくれ、おい！

医者 …だれだ？ 今日はまだ終わったのに… うっ、ザアカイ、何しに来た？

ザアカイ ケガ人なんだ。助けてくれ。

医者 ケガ人？ どこに。だれもいないじゃないか。

ザアカイ おれの家だ。今気を失っている。頭を打ったんだ。頼む、何とかしてくれ。

医者 へえ、あんたの口からそんな言葉を聞くとはな。悪いが、気を失っているんじゃないしにもどうしようもない。気がつくまで待つんだな。

ザアカイ そんなこと言わねえで来てくれ。おれじゃどうしていいか分からねえんだ。

医者 じゃあ、この薬草を持っていけ。鼻先に近づけたら気がつくかも知れん。

ザアカイ これだけか？ 頼むからちゃんと来て診てくれ、金ならいくらでも払う。

医者 金？ ふん、わしらから散々ふんだくった金か、この取税人が。そんなに金があるんなら、ローマの名医にでも診せるんだな。さあ、帰った帰った。

—ドアがバタンと閉まる。ザアカイ叩き続ける—

ザアカイ 先生、おい、先生！

N とぼとぼと家へたどり着くと、ザアカイはまだ動かないルデヤの手を取ってつぶやきました。

ザアカイ ルデヤ…。おれのせいで医者にも来てもらえねえ。お前の言うことをもっと早く聞いていれば、こんな事にならずに済んだかもなあ…。金…。金か。何だ、金なんていくらあったって、こんな時やあ何の役にも立たたねえ。くそっ。ルデヤ、このままお前が目を覚まさなかったら、おれはどうしたらいいんだ、なあ、ルデヤ…。

N ザアカイは今、初めて彼女にすまないと思いました。みんなに嫌われている寂しさをぶつけて、彼女に甘えていた自分に気がついたのです。でももう遅いかもしれない、そう思うとザアカイの胸は痛むのです。

N 次の朝を待ちかねるように、ザアカイは再びゆうべの医者の方へ向かいました。その道の途中、女たちが立ち話をしているのがザアカイの耳に入りました。

女1 …それ、本当なの？

女2 本当だよ。イエス様とお弟子さんたちがこっちへ向かってるのを見たって言ってたもの、あの行商人たち。

女1 へえー、じゃあ本当に来るんだわ。まあ、どうしましょ。

女3 あたし、みんなに知らせてくる。病人がいたら通りまで連れて出たほうがいいものね。

ザアカイ お、おい、病人がどうしたって？

女1 何、あんた？  
女2 あらやだ、子供かと思ったわよ。まあずいぶんと…  
ザアカイ ああ、子供でも何でもいい。それより病人がどうのこうのって今言ったろ。  
女3 ああ、イエス様の事ね。  
ザアカイ 何だ、そいつは？ まじない師か？  
女2 まあ、ずいぶんなこと言うよ、この人。イエス様のように清らかで気高い方がおるもんかね。あの方はメシアなんだよ。その辺のまじない師と一緒にしたら、バチが当たるよ。  
ザアカイ メシアって、あの、メシアか。  
女2 そう、ユダヤを救って下さる、あのメシアだよ。今、神の国をつくるためにユダヤのあちこちを回ってるんだ。  
ザアカイ それで、そのイエス様は病気を治せるのか？  
女3 そりゃあメシヤだもの。イエス様がお触りになるだけでどんな病気でも、いえ、死んだ人でさえ生き返るらしいよ。  
ザアカイ そ、そんならルデヤもきつと…。

N イエスは、奇跡を行ったり病気を治したりしながら、人々に神の福音を<sup>0</sup>宣べ伝えていました。ユダヤの人々は、イエスがローマの支配から自分たちを開放し、ユダヤ人の国をつくってくれる救世主だと信じていました。イエスに頼めば、ルデヤを助けてもらえるかもしれない。ザアカイの心は躍りました。そして、家と通りを歩き来してイエスの通るのを今か今かと待ちました。

N そして3日が過ぎました。ルデヤは目を覚まさないまま、だんだんに弱っていきま  
す。もしこのままイエスが来なかったら…。いえ、たとえ来ても、イエスのそばに行  
けなかったら…。ザアカイは次第に不安になっていきました。

ザアカイ 第一だ、おれなんかの言うことをメシヤのイエス様が聞いてくれるのか？ おれは  
同胞のユダヤ人から金をだまし取っている取税人だ。神の国になんか、入れても  
らえるわけがない…。

N 不安の中でザアカイは、自分が今までしてきたことを悔やまずにはいられません  
でした。

N そして4日目、とうとうイエスはエリコの町にやってきたのです。ザアカイは、イエス  
の姿をせめて一目見ようと通りに出ました。通りにはもう、大勢の人々が集まって  
います。



ザアカイ　　こりゃあ、すげえ人ばかりだ。これじゃ何にも見えねえ。おい、通してくれ、前に行かせてくれ。

男1　　こら、何だこいつ、割り込むな！

女4　　ちょっと、押さないでよ！

男2　　あっ来たぞ、イエス様だ！

—群衆がどよめく—

ザアカイ　　通してくれ！ おれはどうしてもイエス様を見たいんだ！ くそっ、見えねえよ。

N　　ザアカイはイエスを見ようと懸命に飛び跳ねましたが、背が小さいせいで、人がきの向こうを見ることはできません。イエスはもうそこまで来ている様子でした。

ザアカイ　　どうしよう、何か、何か背の高いもの…。あっ、あれだ！

N　　ザアカイは近くにあったいちじくクワの木に器用に登ると、前に張り出した枝にまたがって通りを眺めました。

ザアカイ　　あれか！ あの白い衣を着ているのがイエス様…！

N　　その時、イエスの目がザアカイの目と合いました。そしてそのまま、イエスはザアカイの登った木に近づいてきました。人々の目がイエスの視線を追って、木の上のザアカイに向けられました。

ザアカイ　　えっ…

イエス　　ザアカイ。

ザアカイ　　…えっ？

イエス　　ザアカイ、降りてきなさい。

ザアカイ　　おっ、おれに言ってるのか…？

イエス　　さあ、早く降りてきなさい。今日はあなたの家に泊まることにしてある。

ザアカイ　　おれ、いや、あっしの家に？

N　　慌てて木から降りてきたザアカイに、イエスは優しく、しかし威厳に満ちた声で語りかけました。

イエス　　さあ、案内してくれるね。

ザアカイ　　へ、へえ、喜んで！ いや、でも、何であっしの所に…。イエス様、あっしの事、御



存じなんで…？

N イエスの言葉に驚いたのは、集まった人々も同じでした。

一人つつぶやくー

男1 何でイエス様がザアカイなんかと…。

女4 それに、家に泊まるですって？

男2 イエス様、あんな罪人の所に行かれる気なのか？

男1 ユダヤの裏切者なのに…

イエス あなたは、わたしに会いたかったのでしょうか。

ザアカイ へえ、そりゃあ。でも、あっしは、その、…取税人だし、悪いこと山ほどしてるし…。イエス様に声をかけてもらえるような人間じゃねえです…。

イエス わたしは、あなたに会いに来たのですよ、ザアカイ。

ザアカイ イエス様、どうして… どうして…。(大泣き)

N ザアカイは、初めて泣きました。涙と共に、今までだれに対しても閉じていた心の中に、すーっと光が差し込んできたような気がしました。

ザアカイ イエス様、あっしは… もうやめます。今までみたいなこと、もうやめます。みんなからだまし取った金も倍に、いや、4倍にして返します。

男1 聞いたか、今の？

女4 へえー、信じらんない、あのザアカイが。

イエス 今日、この人に救いが来ました。この人の心はいやされたのです。わたしは失われた人を捜して救うために来たのです。…分かりますか、ザアカイ？

N ザアカイは、涙でくしゃくしゃになった顔でイエスを見上げました。

イエス さあ、行きましょう。あなたの家へ。

N 家に近付いたとき、ザアカイはやっとルデヤのことを思い出しました。

ザアカイ イエス様、今あっしの家に、ケガをしているのがいて…。ケガあさしちまったんです、あっしが…。

イエス 大丈夫、彼女ならもう元気になっていますよ。

ザアカイ えっ!?

N イエスが前のほうを指差しました。向こうに見えるザアカイの家の煙突からは、2人を迎える準備の煙が、静かに風にたなびいていました。

<完>—————